

論文審査の要旨

報告番号	保研 第 29 号		氏名	宮田 浩紀
審査委員	主査	稲田 正大		
	副査	大重 匡	副査	木山 良二
	副査	根路銘 安仁	副査	山下 亜矢子

Association between satisfaction with meaningful activities and social frailty
in community-dwelling Japanese older adults
地域在住高齢者の重要な活動の満足度と社会的フレイルとの関連

主査及び副査の5名は、令和4年8月3日16時から17時にかけて、学位請求者宮田浩紀に論文発表を行わせ、論文審査を実施した。その発表要旨と審査結果は以下の通りであった。

【目的】社会的フレイルは、死亡リスクの増加、有病率、身体的フレイルより先行するなど健康へ負の影響を与えるとの報告がある。高齢者が知的活動やサロン活動など有意義な活動に従事することで心身に良い影響を与えることが明らかになっている一方で、個人が重要とする活動の満足度が低いと、抑うつ症状や認知症との関連が報告されている。しかし、重要とする活動の満足度の程度によって高齢者が重要とする活動に違いがあるのかについては明らかにされていない。そこで地域在住高齢者の現在の生活のなかで最も重要な活動の満足度と社会的フレイルとの関連および重要な活動の特徴について横断的に調査した。

【方法】対象は、垂水研究2019に参加した高齢者596名であった。重要な活動の聞き取りは作業選択意思決定支援ソフト（ADOC）を用い、最も重要な活動の満足度の5段階で評価した。その他に歩行、握力、社会的フレイル判定（Makizako Five）、認知機能、抑うつ、高次生活機能などの心身機能に関して調査した。対象者は、活動の満足度の高低により高満足群、低満足群の2群に分けられ、各群における重要とする活動や社会的フレイルを含む心身機能の違い、社会的フレイルの下位項目について解析された。

【結果】全対象者のうち社会的フレイルの有病率は18.6%であり、先行研究と同様の結果であった。高満足群と低満足群の比較においては、両群間における重要な活動の特徴に差がなく、低満足群は、社会的フレイル、抑うつ傾向の割合が高く、高次生活機能が有意に低い結果となり、社会的フレイルは重要な活動の満足度への影響因子であることがわかった。また低満足群は、社会的フレイルの下位項目にも影響があった。

【考察】高齢者は社会的な活動に従事し、個人が重要な活動に対する満足度を高めることで精神的健康を維持できる可能性や活動の種類にかかわらずこれらの取り組みを継続することの必要性が確認された。これらのことから地域在住高齢者の重要な活動に焦点を当てた研究として、新たな知見が得られたため、地域在住高齢者の支援に役立つと考えられた。研究の限界については、解析にあたって地域の特徴などを考慮することや複数の地域での調査と比較が必要であることがわかった。

審査の結果、5名の審査委員は、本論文は、地域在住高齢者における支援の実践に汎用できることから、博士（保健学）の学位論文としての価値を十分に有すると判定した。